

## Vision Quest Insight 「リスニング対策」の解説と指導案

### —音声学的解説と教壇での指導のヒント—

甲陽学院中学校・高等学校教諭

西村 玲和

#### 1. はじめに

「英語の授業における発音指導の要素として必要なことは何だろう」。言語学の中で発音といった音声現象を研究している分野を音声学と言ひ、その音声学者たちが集まった日本音声学会という学会があるのだが、その中でこの疑問に一つの答えを出そうと試みられたことがある。2020年の日本音声学会の学会誌に掲載された「英語教員養成における音声学教育—日本人英語教員のための「教職音声学」試案—」というタイトルの論文（杉本・内田(2020)）である。ここでは、英語の発音指導に必要な項目を列挙し、さらに優先度から分類するという試みがなされたことがある。

この論文はインターネット上で誰でも無料で読むことができるので、ぜひ一読をお勧めしたいのだが、その論旨を以下に引用する。

本稿は英語教員を志望する大学生に必要とされる音声学授業（教職音声学）の試案を示すことを目的としている。発音モデルには一般米語を用い、聞き取りモデルとして多様なアクセントに触れる機会を設けることとする。授業には、「宣言的知識（音声学的知識）」「手続き的知識（音声指導に関する知識）」「発音および聞き取り力の訓練」の三つの要素を含める。また、英語発音のすべての項目を網羅的に扱うのではなく、明瞭度の高い発音につながる音声項目を選定し、優先的に指導すべきである。この授業を通じて、教員志望者は音声指導に必要な知識や手法と、生徒の手本となる明瞭度の高い発音を身につけることを目標とする。

つまり、英語の教師は、「発音および聞き取り力の訓練」という実際的なことの前段として、「宣言的知識（音声学的知識）」と「手続き的知識（音声指導に関する知識）」を持って教壇に立つべきである、そしてそれを英語教員養成の教職課程で学ぶべきである、とこの論文では主張されている。

とはいえ、あらためて発音の指導をせよと言われてたり、リスニングやスピーキングの授

業で英語の音声変化について体系的に説明せよと言われてたりしても困る、という先生方もいらっしゃるだろう。そこで本稿では、そんな先生方の強い味方になるべく、Insightの「リスニング対策」ページを使いながら、英語の発音指導における「宣言的知識（音声学知識）」と「手続き的知識（音声指導に関する知識）」について深掘していきたい。

## 2. 英語の発音指導として盛り込むべき項目

先ほどの杉本・内田(2020)から、英語の発音指導として盛り込むべきとされる項目とその優先順位について引用する。

表1 「教職音声学」で扱う音声項目

音声学の枠組	優先度1	優先度2	優先度3
イントネーションなど 発話全体の音声特徴	区切り方 核強勢の配置	文タイプと音調 下降調と上昇調	その他の音調
リズム	内容語と機能語の区別	強勢拍リズム	機能語の弱形
強勢	語強勢の置き方 語強勢と接尾辞の関係	語強勢と品詞	第二強勢、強勢移動 複合語強勢
単語の読み方	重要語彙の発音 カタカナ語との比較 活用語尾の読み方		
音節構造 音素配列	音節の教え方 語頭/語末の子音連続 語末の子音	語中/語間の子音連続と音の脱落	音節の境界 /l, r, j, w/の無声化 鼻腔開放、無面開放
子音体系 子音の記述 音素 異音	発音 :/θ, /v/ 区別 :/f-v/, /f-h/, /v-b/ 発音 :/s/, /z/, /ʃ/ /s-ʃ/ (特に /i, i:, iə/ の前) 発音 :/r/, /l/ 区別 :/r-l/	/p, t, k/の気音 /t, d/のたつき音化 発音 :/θ/, /ð/ 区別 :/θ-s/, /ð-z/ 暗い [ɪ] 発音 :/h/ (/i, i:, iə/, /o, u:/の前) 発音 :/n/ (特に語末), /m/, /ŋ/ 区別 :/j-φ/, /w-φ/	有声阻害音の無声化 発音 :/ɟ/ 区別 :/f-θ/, /v-ð/ 発音 :/tʃ/, /dʒ/ 区別 :/dʒ-ʒ/, /dʒ-z/ 発音 :/j/, /w/ 区別 :/ŋ-ŋg/
母音体系 母音の記述 音素 異音	発音 :/u/, /i:/ 区別 :/i-i:/ 発音 :/æ/, /ʌ/, /ɑ/, /ɑ:/ 区別 :/æ-ʌ-ɑ-ɑ:/ 発音 :/ɔ:/, /oo/ 区別 :/ɔ:-oo-oo/ 発音 :/ɑ:-/, /ɑə/ 区別 :/ɑ:-ɑə/, /ɑ:-o:/	発音 :/ɑ/, /u:/, 区別 :/ɑ-u:/ 無声子音前の母音長変化 発音 :/e/, /eɪ/ 区別 :/e-i, æ, eɪ/ 発音 :/aɪ/, /aʊ/, /aʊ/ 発音 :/iə/, /eə/, /ɔə/ 区別 :/iə-eə/	弱母音 発音 :/oə/ 区別 :/oə-ooə/
つづり字と発音*	初級ルール	中級ルール	上級ルール
リスニング (英語の多様性)	様々なアクセントを聞く体験	アクセント差 (R音性など)	アクセント差 (/j/の脱落, ask words**など)
リスニング (発話スタイル)	自然な速度や様々なスタイルの発話を聞く体験	連続音声の特徴 同化, 脱落, リンキング	

\*竹林・斎藤 (2008) の20の規則の内、子音字・母音字の読み方など比較的規則的なものを初級ルール、硬音・軟音の (c, g) などやや複雑な規則を中級ルール、弱母音など優先度を低く設定した音声項目に関わるものを上級ルールとした。

\*\*GAでは/æ/, RPでは/ɑ:/が使用される語群。

この表の「音声学的枠組」を筆者なりに分類させてもらおうと、以下のようになる。

- (1) 音素（子音体系、母音体系）
- (2) フォニックス（つづり字と発音、単語の発音）
- (3) 超分節的特徴（イントネーションなど発音全体の音声特徴、リズム、強勢）
- (4) 音声変化（音節構造・音素配列、リスニング（発話スタイル））
- (5) 世界中の色々な英語（リスニング（英語の多様性））

発音指導において、それぞれの子音や母音をどう発音するかという(1)は小学校や中学校の初期段階である程度の指導がなされてきただろうし、単語を覚える中で(2)についても一定の指導はなされただろう。(5)のような世界の色々な英語を聞く体験も、検定教科書の素材音声の多様化をはじめ、現代では様々な配慮がなされていて、生徒には一定の経験値もあると考えられる。また、検定教科書、たとえばELEMENTのBook1を見てみると、その最初のLesson1～3には(3)超分節的特徴、つまりイントネーションやリズムに関する説明や練習をするセクションが存在する。ちなみにELEMENTの指導書には、拙稿の音声学的解説と教壇での実践方法について(3)の観点の記述があるので、そちらもぜひ参照されたい。

さて、以上のように考えてみると、実は発音指導が最も手薄であるのは、(4)音声変化、なのではないかと推察する。実際、単語1つ1つの音は聞き取れても、ひとつなぎの文となるとなかなか聞き取れないという英語学習者は多い。これは英語の音の変化を理解していないことが原因と考えられる。自分が発音するときはいざとなれば「日本人らしい発音でも通じればそれでよい」でよいのだが、リスニング力を高めるためには音声をただ聞くだけでなく、実際に自分で何度も真似して音読してみる、それも、どのように音声変化が起こるのかについて仕組みを理解しているものを真似して音読してみる経験値が必須であろう。この(4)について具体例を挙げて練習できるのが、Insightの「リスニング対策」ページなのである。

以下では、Insightの「リスニング対策」を最大限味わい尽くすべく、ELEMENTのBook1の指導書と一部重複しながらも編集しなおしたのも交えながら、教員が持つべき発音やリスニング指導の「宣言的知識（音声学的知識）」と「手続き的知識（音声指導に関する知識）」について記述していきたい。

### 3. 宣言的知識 – 音声変化の概論、音声学の知見から–

単語には、引用形と呼ばれる、辞書の発音表記（のうちの少なくとも1つ）通りの発音が存在するが、文の中では、その引用形通りにすべての単語が一単語ずつ別個に発音されるわけではない。前後にある様々な音の影響を受けながら、微妙に変化しながら発音されていく。その変化は以下の三つに分類できる。

#### (1) 脱落 (elision、dropping)

引用形には存在する音素が連声形では存在しなくなる

#### (2) 同化 (assimilation)

引用形の音素が連声形で別の音素に変わること

#### (3) 連結 (liaison)

引用形には存在しない音素が連声形で出現すること

ただしあらかじめ断っておかなければいけないことは、連声は accent（発音の方言差）による違いが非常に大きいということだ。テレビやラジオなどのメディアで中心的に使われている発音を、イギリスの場合には GB (General British)、アメリカの場合には GA (General American) と表記するが多いが、Insight 本冊では GA の発音を中心に発音表記を行っているため、本稿においても GA を中心としながら必要に応じて GB の発音にも触れていくこととしたい。

さて、まずはこれらの音声現象とは何かについて、一つずつ説明する（この説明は ELEMENT Book1 の指導書の内容と重複する）。ここが音声学的知見による宣言的知識の説明となる。専門的な内容も多いので、もし軽く読んでみて厳しければ、4.の Insight を用いた指導例–手続き的知識–まで飛ばしてから戻ってきていただいても構わない。ただし、3.4 発音指導に役立つその他の音声学的知識については、そこで出てくる用語が4.での説明の前提となっていることを断っておきたい。

### 3.1 脱落 (elision, dropping)

#### (1) 子音の脱落

##### ・ /t/ と /d/ の脱落

全ての子音の中で、/t/ と /d/ が脱落することが多いが、/s/ の脱落も存在する。例えば

1. /s/ が脱落し、/ʃ/ のみが発音される。

in case she /sʃ/ → /ʃ/

2. /t/ が脱落し、/ð/ のみが発音される。

at the shop /tð/ → /ð/

3. /d/ が脱落し、/t/ のみが発音される。

she had to /dt/ → /t/

他の例として、以下の語句は連声において斜体になっている t や d を発音しない (iced tea / don't know / must go / old man / send back)。

一単語でも、absolutely の /t/ や、grandfather の /d/ が発音されないケースも見られる。

##### ・ /k/、/h/、/v/ の脱落

上記の /t/ と /d/ に比べ頻度は少ないが、/k/、/h/、/v/ の脱落もある。/s/ の脱落は、/sk/ という並びでよくみられる。/h/ の脱落は、弱形で起こりやすい (Cockney に多いなど、accent による差も)。/v/ については、ほとんどが of で見られ、弱形の一部とみなされることもある。

I'll ask them. /kð/ → /ð/

I didn't tell him. /lh/ → /l/

sweet child of mine /vm/ → /m/

##### ・ /j/ の脱落 (yod-dropping)

連声ではなく一単語内の脱落だが、最後に取り上げておきたい。

YouTube /tj/ → /t/

assume /sj/ → /s/

flew /lj/ → /l/

GA (アメリカ英語) に多い発音である。GB (イギリス英語) では /j/ が維持される傾向にある。たとえば YouTube は GA で /jú:tu:b/、/jú:tju:b/、オーストラリア英語では /jú:tju:b/ となる。この変化は、歯茎近辺が調音位置である子音と連続する場合 (例: /sj/、/tj/、/lj/) を中心に起こりやすい。常に起こるわけではないが、歴史的には blue も /j/ が発音されていた時期があった (/lj/ → /l/)。